

平成 23 年産 熊本畳表価格高騰について

熊本県八代市千丁町新牟田 179
肥後物産株式会社
<http://www.higobussan.co.jp>

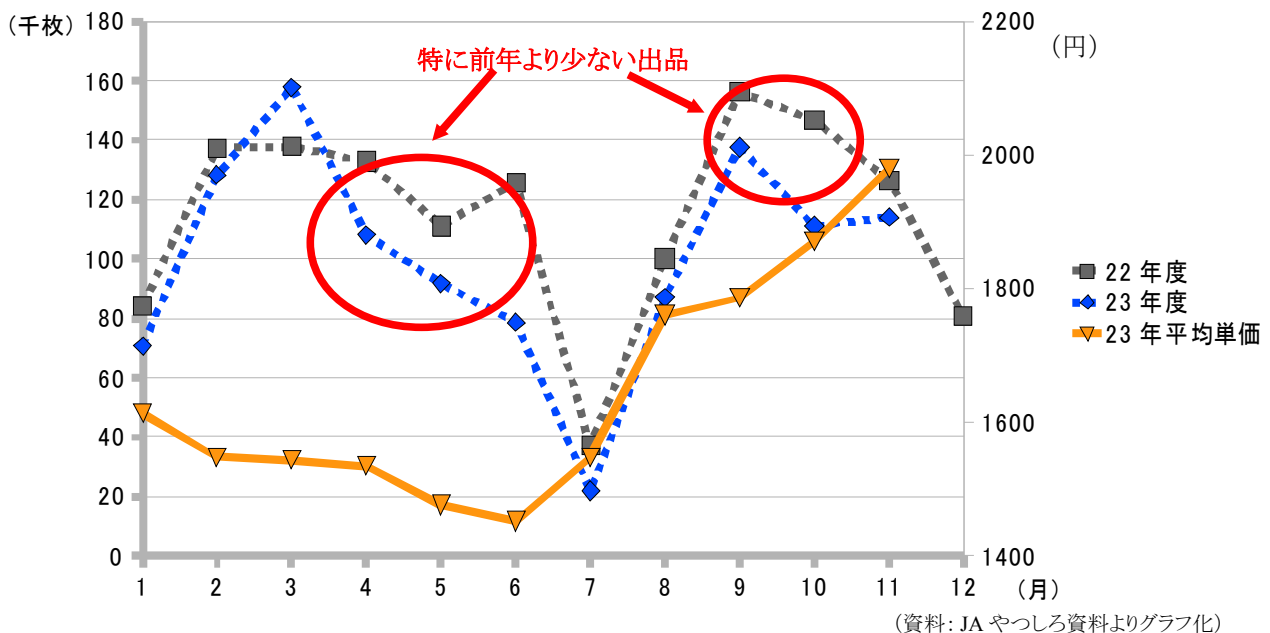
新年明けましておめでとうございます。皆様には、平素より熊本畳表をご愛顧頂きまして誠にありがとうございます。昨年 3 月 11 日の東日本大震災により被災された皆様には謹んでお見舞いを申し上げますとともに、一刻も早い回復を祈念致します。

さて平成 23 年度の相場は 7 月から値上がりを続け、11 月には最高価格となりました。今回の価格高騰の背景は様々な要因が重なって起こったように思われますが、基本的には、「生産農家の減少と 2 年続きの不作により、畳表の供給が需要以上に少ない事」が主な原因と思われ

ます。平成 23 年の 1 月頃は、22 年産が不作だったために、早くから「今年は 3 月で原料となる”い草”が切れる農家が出てくる」と言われていました。＜図 1＞のグラフは平成 22～23 年の JA 市場における出品の推移を比較したのですが、実際に、23 年 4～7 月と 9～10 月における出品枚数が前年比 20～30%少なくなっています。この大きく落ち込んだ出品時期のあとに品薄状態となり、大きな相場高騰が起きたように思われます。

＜図 1＞

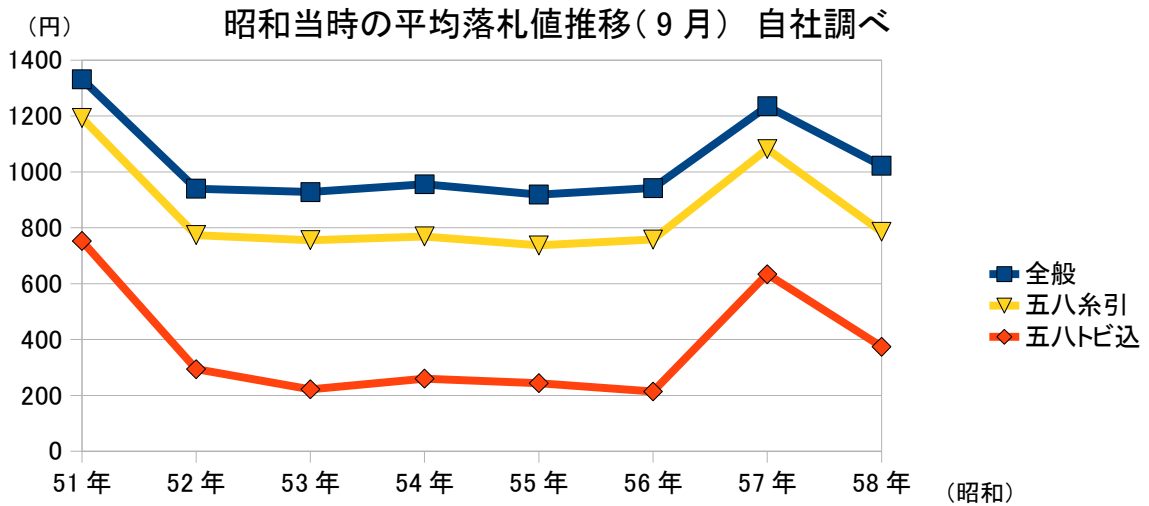
JA やつしろ市場 畳表月別出荷実績



現在の高値となって、お客様からは「20 年前の相場になったね。」とか、「昭和 50 年代や昭和 60 年代には、飛込(トビコミ)で 1000 円を超えてチャボで 1500 円した時期があった。」など過去の状況を聞かせて頂く事がありました。

＜図 2＞は昭和 51～58 年の 9 月時における相場の推移です。当時はまだ、国産畳表が主体であったことから、短いイ草を使用した飛込やチャボといわれた下級品の生産が行われ、1 反(10a)当たり約 600 枚の生産がありました。その後中国産の輸入が増え、飛込やチャボの中でも下級品は採算が合わず短い”い草”は廃棄され、これらの製品は姿を消し 1 反(10a)あたりの生産枚数が現在約 350～400 枚となりました。

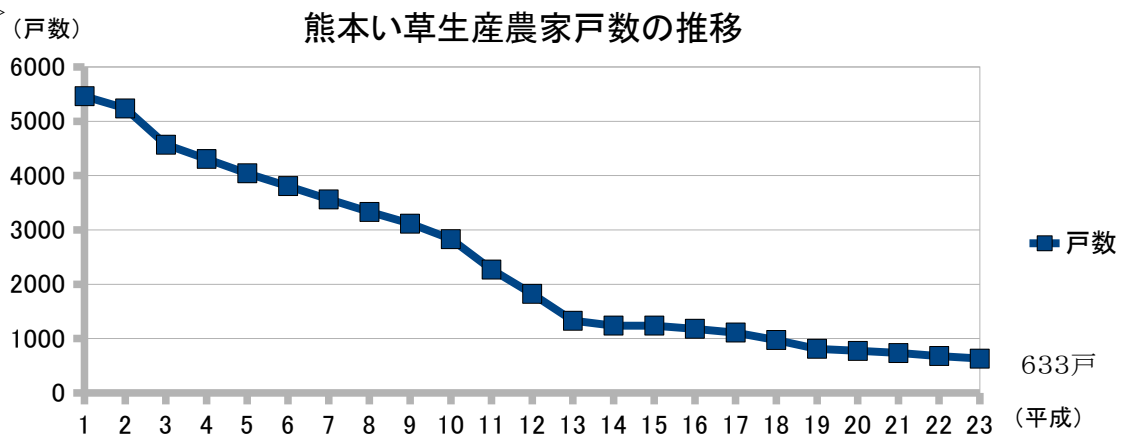
<図2>



(資料: 自社資料よりグラフ化)

1反(10a)当たり600枚から350-400枚と、昭和の頃の約60-65%の生産量で同じ収入を上げなければいけない構造となりましたが、平成に入ってから住宅構造等の変化による畳表の需要減と中国産との競合の中で再生産価格に届かず、生産農家戸数は年々減少してきました<図3>。参考まで農家戸数は平成元年を100%とすると平成23年度で11%となっています。

<図3>



(資料: い業データブックよりグラフ化)

今回のような急激な相場の変化より、出来れば今後は安定した相場を望むものですが、一方で、生産農家にとって再生産出来る価格帯は必要と思います。現在、生産意欲がでてくる反収は1反(10a)当たり80万円と言われています。今回高値となった市場落札平均単価が1980円で、1反に400枚織れるところで約80万円となります。この相場が維持出来ず、もし平成22年度までの相場であれば生産農家の減少は更に進むものと思われま。

急激な品薄と相場上昇が今後どのように展開するか不透明な面がありますが、今後の生産見通しは、23年春より更に早めの草の消化が進む可能性もあります。それは、新草の切り替わり時期において、平成22年産は10月から新草が始まった事に対し、平成23年産は8月から始まり、約2ヶ月早かったためですが、約1割程度重量が薄く織られており、この分が早めの草の消化を少し遅らせるかもしれません。

一方で国産需要に関しては、急激な値上がりにより中国産への移行がみられ、どの程度の移行かによって需給バランスが変わり相場に影響してくると思われま。私たち産地サイドの生産者や流通関係業者は、今回の高値に驕ることなく、品質向上に努め長期的に再生産価格が支持されるよう努力していきたいと思われま。

敬具